

RITS 応化会ニュース

立命館大学

教育、対話そして次代

応用化学系学系長

菊池 正和

今年もまた化学科、生物工学科あわせて約230名の新生を迎えました。

卒業生を送りだし、新入生を受け入れるのは大学の恒例化した年中行事の一つですが、応用化学系として今年一つだけ違う点は、4年前に設置された生物工学科の第一期生が4回生になったことです。したがって来年は初めて生物工学科の学生が世にでていくことになります。学生達は新たな分野の開拓を目指して、新しい就職活動を展開してきました。今後は化学科のみならず生物工学科の後輩達にも諸先輩方の暖かな配慮と叱咤激励をお願いしたいと思います。

今年就職協定が廃止されたために、従来の慣習があてにならなくなったばかりではなく、就職活動の長期化をもたらしめました。その結果、4回生や大学院博士前期課程の一部の学生の教育に長期間のプランクを生み出したことは極めて残念なことです。また女子学生の比率が年々上昇している応用化学系では、女子学生の就職難はこれまた大きな問題です。景気は上向きとはいえず、まだまだ好景気には程遠い時代に世にでていく学生達が、自分達がおかれた厳しい状況を将来の糧にして力を発揮

してくれることを願うばかりです。

このような社会情勢のなかで、最近では全国的に学生の基礎学力の低下がしばしば問題になっております。その根底には偏差値の影が見え隠れしていますが、忘れてはならないことは、試験で試すことのできる人間の能力は記憶力などごく一部であって、多くの能力がまだ試されないという点です。学生には最低限度の学力は要求されるでしょうが、一度社会へ出ると個性や積極性に加えて、創造力、判断力、統率力、洞察力、実行力など学生とは違った能力が求められ、さらには国際性も期待されるでしょう。大学では学生の学力向上を目的に、来年度はカリキュラムが一部改訂されることになっています。大学の役目は社会に役立つ人材の育成にあるわけですから、このような改革に加えて、教員が学生を一方から見ることなく、常に学生の持つ未知の能力を引き出す努力を怠ってはならないと思っております。さらに学生には自覚を喚起することによって、世間の評価に耐える学生を世に送り出したいのです。

一方最近の少子化にともない、今後徐々に大学志願者が減少して、20

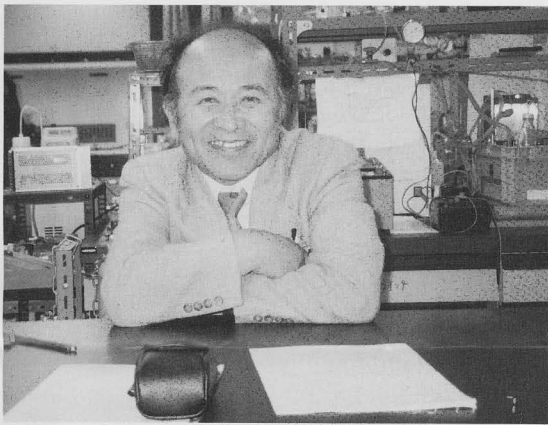
09年には大学志願者の10.0%が合格する時代が到来すると予想されています。そのようななかで、多くの大学ではその生き残りをかけていろいろな試みが検討されています。特に私立大学では早急に対応策を講じる必要があるわけですが、同時にそれは大学が独自色をたせるよいチャンスでもあります。この機会に、現在キャンパスに学ぶ学生達もすでに卒業した会員の皆様も、次代の母校の姿を一度頭に描いてみていただきたいのです。次代に向けて大学が変革の先頭に立っているか否か、そのためには、正確な現状把握と先見性のせるかは、正確な現状把握と先見性のある将来予測にかかっています。それには単に大学内での孤立した議論だけではなく、豊富な経験を積まれた会員の皆様の提言が極めて大きなウエイトを占めています。皆様の提言はそのま

ま立命館の将来を決める重要なキーワードとなるはずです。幸いにして応用化学系には応化会という組織があり、会員の意見を反映させる場がもたられりやなど、多岐にわたる形式の場が、なごりにも、会員の皆様にこの場をもっと有効に利用していただく工夫も必要です。それによって教員もより広く学外の状況に目を開くことが可能になり、同時にそれは教員の意識改革にもつながると思っております。会員相互のコミュニケーションを活性化して次代へ提言をいたしたくためにも、大学は多々の人々を開かなくてはならないと同時に、将来を通じて常に皆様に役立つ情報基地でありたいものです。応化会ならびに立命館の次代のさらなる発展のために、ワンウェイではないコミュニケーションの大切さを痛感しています。最後になりましたが皆様のますますのご活躍をお祈り申し上げます。



定年退職にあたって

北村 清



今年も残暑が長いようですが、さすがに京都も五山の送り火ともなる朝夕はめつぷりと涼しく、虫の音がにぎやかに聞こえるようになっていきます。各地の同窓会の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

さて私こそ、この三月で立命館大学を定年退職いたしました。退職に当たりまして、同窓会をはじめとしていろんな方面から、記念品あるいは記念品代をどっさりいただきました。また何度も送別会や送別パーティーというのをしていただきました。たつた十一年動めただけの私には過分であり、まことに有り難くもったいないことに存じております。

この間の世の移り変わりはまことにめざましいもので御座いました。昭和から平成になりました。パブルというのがあり、それがはじけて空前の不景気となり、それがこの頃ようやく立ち直ってきました。この間、立命館大学はめざましい拡充発展を遂げました。生物工学科が創設され、化学教室は化学科との両学科を含む応用化学系になりました。一面の松林と池だったところがBKCになることを目のあたりに見、そこに移転してきました。わたし自身、衣笠の理工学部化学教室に来て、BKCの生物工学科から去ることになりました。まったく予想外のことでした。

十年ひと昔とはまったくよく言ったものです。しかし、わたしにはアッと言う間の十一年です。十年一日のことごとく申します。うかかかと十一年を過ごしたという悔恨も若干御座います

が、かえりみればたのしい充実した十一年でした。わたし自身がふた昔ばかり前、企業でその創造に立ち会った、草分けないしは先祖さまのひとりで、あとと自負している膜分離プロセスの基礎を物理化学的に見直すという作業に取り組んできて、毎年何人かの卒研生が入ってきて、ともかく、実験研究にのめりこむというのはどういことかは体験して、社外雇立っていただくことができました。毎年卒業生の諸君に、先生の物理化学がもたらしたのかなったなあと言われるような化学熱力学の講義をしてきました。毎年何とかならないかと悩みながら、気がしなげらってきたものです。過ぎ去ってしまふと、



「学生好きな北村先生」

谷口 吉弘

(昭和四十年卒)

略歴
昭和三十三年京都大学理学部化学科卒業。
滋賀県立堅田高等学校教諭、昭和三十三年立命館大学理工学部化学教室助手。
昭和三十六年旭化成工業(株)入社。
昭和六十二年立命館大学理工学部教授。

北村先生は木造校舎の古きよき衣笠時代、立命館大学理工学部化学科に創設まもない物理化学研究室の鈴木先生(第一代目の助手として)と過ごされ、その後、旭化成工業株式会社へ転出、鈴木先生の退職にもない、その後任の

教授として、衣笠キャンパスの6号館の研究室に戻ってこられました。1994年、理工学部の新キャンパスへの移転に伴って、退職前の最後の3年間は最新施設を誇る「びわく・くさくキャンパス」で物理化学、化学工学の教育と研究に従事されました。このように、北村先生は物理化学研究室の創設期と二十十年程、物理化学の教育と研究に携わり、ときには、学外から物理化学研究室の発展ぶりを見てこられた先生でもあります。
あまなほは北村先生を「化学科でもっとも教授らしくない教授」と評しています。学生の抱いている「大学教授た

をお祈りいたします。

カナダ バクーバーにて

「北村研での思い出」

吉村 幸浩
(平成元年卒)

をうけていられるうちに、次に研究のおもしろさと厳しさ、また決して手をゆるめずに常に高いステップを目標として向上していくという姿勢を学びました。日々の生活は大変厳しくはあったのですが、つらいという気持ちはなく、研究室は私にとってある種の「居心地の良い場」でありました。時々、仕事がつらいときなどに、先生達に受けた研究態度や人生についての教訓を思い出して、頭の中をよぎることがあります。

北村研での思い出の中で忘れてはいけないことの一つに、太泰の北村先生のマンションで、年に数回必ず開かれていた「飲み会」の事があります。その頃、北村先生は単身赴任されていたこともあり、いつも院生を含めた研究室のほとんど全員が参加していました。多いときには10人ばかりがおしゃりしていました。私は、なぜか酒をのすべくたくさん飲むという印象を最初に先生に持たれました。ありがたいうちに、北村先生は私のために「カミュー」や「ナレナツ」といったかなり高価なお酒を用意して下さい、「吉村、酒あるぞ。飲め。」とよく言っていました。



ました。そして、それを私は一人で抱え込んで、ぼぼ空にしてしまっていたようにです。やがて、酔いが醒まってきたら、いつも先生が心地よさそうに居眠りを始められるので、お開きとなるのです。この飲み会の時は、必ず一人や二人は飲み過ぎて家に帰れなくなる学生がいて、先生の家に泊ってもらっていました。また、先生の奥様が時々は来られていたことがあり、その時はとてもおいしい手料理をごちそうしてもらったのを覚えています。先生の奥様はとても上品な方で、先生が常々「嫁さんは、絶対妥協せずに自分に一番いいと思う人と結婚しろ」と言われていたことがうなずけます。とにかく、この時のことは、ひよっとすると研究しているときよりも(？)楽しかった。

かもしれない。私もこのごろ学生を家に呼んだりするようになり、いかに先生が大変だったのかとになり、いかにいまさらながらに感じます。先生と一緒に研究室の皆とワイワイはしゃいだ事は、一生忘れられない思い出となるでしょう。

長々とつまらない事を書きましたが、北村先生への感謝の気持ちを何とか表したかったといつてご容赦下さい。これからの北村先生の健康をお祈りして、拙文を終わりたいと思います。

北村先生、長い間どうも「苦勞様でした。未熟な私をこまごま導いてくださいまして大変ありがたうございました。

技術セミナー

「日本の科学技術の現状と今後の展開」

西島 安則

今回は、第十二回科学技術セミナーの演者をお願いしました西島安則・本学を員教授に、ご講演での題材をもとに、執筆していただきました。

西島教授は、母校の京都太字工学部にて、高分子化学の分野で多大な業績を収められ、昭和六十年から平成三年まで、京大総長の要職を勤められました。その後、立命館大学に客員教授として迎えられ、現在、立命館の理事としても活躍されておられます。



るもの」のイメージがどのようなか定かではありませんが、北村先生の人物像の一面面をよく補えて、と思います。北村先生は化学科教授陣の中でも、幅広い社会的見識と同僚をも受容できる性格をお持ちで、立命館大学の学生をどの先生よりも愛された先生であることは確かです。コンパの後、先生のアパートの二次会に参加して、そのまま泊り込んだ経験の持ち主は多くおられるでしょう。長年、企業に勤務されたご経験から、就職員として化学科の学生の就職のお話としてされました。このよき関係が、ある時期、一流企業に就職するなら、「北村研」への噂が学生の間にまことしやかに流れた時代もあったように聞いております。卒業生の中に、北村先生のお世話で一流企業に就職し、活躍している諸君も多いと思います。

21世紀には18歳人口が減少に転じ、それともなう、大学の存在の危機が叫ばれています。また、新しい産業の創設のために、今ほど、大学と社会(産業界)の連携の必要な時代はないでしょう。大学教授といえども研究ばかりの象牙の塔ではないけません。このような困難な時代にこそ、北村先生のような幅広い社会的見識を有する教授の存在こそが大学にとってはますます重要となります。退職後も、しばらく非常勤講師として、立命館大学に勤務されます。ぜひ、お思召を拝借したいものです。北村先生は「存じの通り」の学生好きです。卒業生のみなさん、北村先生を訪ねてください。

最後に、北村先生のご健勝とご活躍

ジェイムス・ワット(一七三六—一八一九)が、機械工としての修業を終えて、スコットランドのグラスゴー大学の工作室の技官として、実験・研究機器の製作や修理を担当する職に就いたのは、一七五七年、彼が二十歳を過ぎたときであった。

グラスゴー大学の自由闊達な学風の中で、ワットは間もなく、化学・物理学の教授のジョセフ・ブラック(一七二八—一七九六)と親しく付き合いうようになった。一七五九年にワットは当時教材として使われていたニューコメン機関の修理をするようになった。この機関は、トマス・ニューコメン(一六六三—一七二九)が一七二二年に発明した大気圧蒸気機関で、鉱山の排水ポンプとして広く使われていた。ワットはこの機関の熱効率を、%以下の極めて低いものであることを知り、何とか蒸気機関の熱効率を改善する方法はないものかと思索し、ブラック教授の部屋を訪れて教えるを請うことにした。

ブラック教授は、化学の分野でも、その頃、炭酸ガスと空気の区別をはじめて明らかにするという重要な研究成果を挙げたにすぎず、物理学では、物質が固体・液体・気体と状態を変化する際に、温度の変化を伴わずに吸収あるいは放出する潜熱という概念を確立して、温度と熱との関係を明らかにして熱力学の基礎を築いた。ワットから蒸気機関の熱効率についての相談を受

けて、積極的に指導し、熱効率を画期的に革新する具体的な難題として、作業シリンダーから分離した蒸気凝縮器の設計をすすめた。

自然科学の成果が、直接、技術革新に結びついた最初の例で幸運な出合いということができ、十年間の努力が実って、一七六九年には、最初の改善された蒸気機関が完成した。そして、一七七五年には、蒸気機関の製造会社も設立され、産業革命の文字通りの推進力としての蒸気機関は、十九世紀のはじめからの鉄と石炭の時代を招来した。やがて、科学技術の成果は、急激に世界の人々の暮らし社会のあり方を変えて、革命と大戦の世紀を経て現在に至った。

大競争時代と戦略

第二次世界大戦後、特に、米・ソ両国で、科学技術の本座と国家の威信を結びつける意識が強くなり、一九五七年の十月の月連の最初の人工衛星スプートニク一号の打ち上げ成功は、米国に大きなショックを与えた。そして、理工系の教育体系、研究開発の国勢、ロケットのあり方の技術的検討と早急な改革が進められたのである。米・ソの熾烈な宇宙での競争は、一九六九年の七月に、米宇宙船アポロ十一号の月面への着陸で、一段落となった。しかし、七〇年代に入って、科学技術と産業の国際関係は新しい様相を呈している。特に、わが国における顕著な技術革新と工業製品の性能品質の優秀さが先進諸国の注目をあつめて、いわゆる「ハ

イ・テクノロジ」が、国際競争の中心課題となった。

一九七九年に発行された米科学アカデミーの報告書では、「競争の時代」を強調して「ヨーロッパ諸国での基礎研究の実力と、日本の極めて印象強い技術革新の力は、米国の今後の産業政策のあり方に対して明確な示唆を与えるものである。」と述べている。それから十四年、再び自信を取りもどした米国は、一九九三年クリントン大統領が就任間もなく「利益としての科学」と題して、「米国は現在と将来のために、科学と、数学と、そして工学において、世界の指導の立場を維持せねばならない。」と演説し、ゴア副大統領とともに情報産業を中心として、利益を正面に打ち出した科学技術政策を推進しはじめた。「もう日本から学ぶべきことは、すべて学びとった。」と米国の産業界のリーダーの一人は語っていた。

一方、英国では、その翌年、一九九四年に「科学と技術を教育、文化、社会の主流に」という国策を打出して、大規模な国家的キャンペーンを開始した。そして、英国の伝統とする純粋基礎研究と応用開発研究を結ぶ「戦略的研究」を振興する構想を打出した。蒸気機関が果した産業革命の発祥の地としての自負と意地がにじみ出ている。そして、さらにその翌年、一九九五年には、わが国でも「科学技術基本法」が成立し、「基本計画」も策定されて、研究環境、研究基盤が積極的に充実されることになった。「戦略」という言葉が盛んに用いられ

れるようになったが、急成長を遂げたアジア諸国を含めて、この世界の競争時代において、十九世紀・二十世紀の科学技術の発展の軌跡をふり返り、今、何が科学技術に求められているのか、人類と地球の将来のために何をなすべきかということが真の課題であり、それこそが「科学技術の戦略」と呼ばれるべきものである。

ロンドンの科学博物館に展示された日本車

十九世紀の中頃、一八五六年に設置されたこのロンドンの科学博物館は、産業革命以来の大英帝国の近代化における栄光ある科学技術の精華を展覧する大博物館で、その中でも、最初に述べたワットの蒸気機関以来の交通機関の発達史の歴史をさすグラウンド・フロアの展示は最も注目されるものであった。

この間、再びそこを訪れたときに、驚いたことは、その展示場の正面に一段高く、日本製の高級車が、スポッライトを浴びて輝いていた。英国の誇る歴史的な蒸気機関車を除き押し込んだような格好で、大勢の観客が日本車のまわりを集っていた。

後継するようには発達しました。オートメーション、コンピュータと、ハイ・テクノロジが、自動車工業を現在の姿に発達させて来ました。この過程で、日本は欧米と少し違った道を行って来ました。欧米では、製造技術の進歩と共に、人は機械から離れ、機械に仕事を任せようになりましたが、日本では、人はいつも機械のそばを離れず、機械を使って人が車を作っていました。そのことが、今、この最高の車を作るようになった原因だと思います。」集った人びとは説明を聴き、改めて、目を輝かせてその車を見上げていた。ハイ・テクノロジのその先端にある日本の伝統の「たくみ」の心を説いているようにも聞こえた。量から質への転換期にある工業の将来を示唆しているようにも思える。

科学技術が結合して、世界を変えはじめてから二〇〇〇年、人びとは、改めて、科学技術と人間性という命題に直面している。目の先の競争意識のみが推進力であるような時代を超えて、何が求められ、何をなすべきかという、人間性に基いた科学技術の新たな総合と成熟の時代に入りつつあると思ふ。



トピックス

中高年者の健康生きがいづくり

健康・生きがい開発財団認定
健康生きがいづくりアドバイザー
東 正弘

（41年生）



一、はじめに

日本は世界第一位の平均寿命の長い国となり、「人生八〇年代」を迎えています。高齢社会の到来が言われるなか、定年後の余暇の過ごし方もまた高齢社会の重要問題です。次期高齢者層（40代・50代）の時代から、定年後のライフプランを自分で設計し、今から「健康生きがいづくり」を進めることを提唱します。

二、高齢社会

65歳以上を高齢者といい、我国の65歳以上の人口比率は、昭和45年7%、平成6年14%となり、わずか25年で高齢社会となりました。諸外国を見ると、イギリス・ドイツ45年、アメリカ70年、スウェーデン85年、フランスは25年か

かっています。日本は急速な高齢化に向かつて、社会制度が実態に追いついていないのが現実です。我国の65歳以上の人口は、平成7年一八〇〇万人、平成12年二〇〇万人と予測されています。

三、健康な生涯設計

人生80年として、生涯時間は約70万時間。内労働時間は8万時間、余暇時間は29万時間が一般的な数字です。人生80年時代の生き方として、40代・50代から生涯設計を準備する必要があります。

「人生80年を行動的に生きる」ために定年後の人生設計を行い、アクティブに行動できる人が医学的にも良く、成人病予防のためには生活スタイルそのものを健康的なものに変えていくよう、積極的な実践努力が必要とす。「栄養・運動・休養」のバランスのとれた生活習慣の確立が健康づくりの基本です。

四、「レジャー白書⁹⁵」より

次期高齢者層の余暇意識調査によると、余暇重視の考え方を強く持っています。余暇時間を自然と親しむという「楽しみ志向」に加えて、「能力開発」「健康づくり」「ボランティア」「地域志向」が出ています。

以上から、次期高齢者層にあつては、より充実した高齢期の余暇生活のために、今のうちから余暇能力や人間関係など「余暇資源」の蓄積に努める必要があります。

五、生きがい

高齢社会の到来に伴い、年金問題、

介護問題などともに、「生きがい」問題が懸案となっています。「人生80年代」、長くなった人生をいかに健康で生きがいをもって送るかが課題となっています。長くなった人生では、現役を引退した高齢期に健康と生きがいを維持することが重要なのですが、「健康な生きがいづくり」は一朝一夕ではできません。従って、早い時期から実行し、備えておくことが肝要なのですが、主として中高年サラリーマンの場合、仕事だけが生きがいというような生活を送ってきたために、定年を迎えた途端に生きがいを失うケースが増加の傾向にあります。

そこで、定年後に備え、現役時代からの、「会社人間から社会人間へ」「仕事人間からゆとり人間へ」といったライフスタイルの変革が叫ばれています。と同時に、中高年者に対して「健康と生きがいづくり」を啓発する役割も求められています。

六、まとめ

「人生80年代」となり、ライフサイクルも変化しています。社会経済も変化し、このような社会情勢の中で、社会・個人の自立意識が必要と多様化したライフプラン設計が要求されます。中高年男性・最も多いのが、「仕事人間」「会社人間」で来られた人です。定年を迎えて、明日から何もすることがない」と悩む人も出てきます。妻から見た夫へのニックネームは「粗大ゴミ」「ぬれ落葉」「おれも族」等と云われています。

を有意義に、健康で生きがいを持って生活できることは人生の喜びです。人生の最後が良ければ思い残すことはありません。そのため40代・50代からライフプランを自分で設計し、趣味・スポーツ・ボランティア活動・地域での仲間づくり等の他、同窓会活動や同窓会を通じての仲間づくりで余暇活動を充実させることも「健康な生きがいづくり」に大切なことです。

二年前にオーストラリアを旅行した際、「ライフ・アクティビティ・クラブ」といって老人余暇クラブが地域ごとに組織化された。スポーツ・音楽・食事・ハイキング等の催しが行われており、定年を心待ちにする方が多く、定年後手持ちがふさで困ることもないという話を聞きました。

今年の七月にスイス・オーストリア・ドイツを見た光景も、老夫婦が屋外でゆとりと時間を費やしている姿を見ると余暇の使方が日本人と大分違うという印象を受けました。「健康な生きがいづくり」のために、ぜひライフプランを考えられては如何でしょうか。サラリーマン川柳（出典第一生命）

「夏休休暇をまともにと年を越し」「健康な生きがいづくり」のお役に立てば幸いです。（一九九七年七月）

（注財団法人健康・生きがい開発財団は中高年層者の「健康な生きがいづくり」を支援することを目的に、厚生省所管で平成三年六月に設立された財団です。

私達のクラスは化学科・新昭和二十五年卒・二十七年卒と、新制大学の第一期生です。旧制専門学校卒業の昭和二十五年に新制大学が開設され、希望者は新制大学の三回生に編入され二十七年に第一期卒業となりました。

戦後時代もない時代で、級友は通常の学生年齢で進学した者が復員軍人、海外からの引揚者など、年齢十数歳の開きがありました。新制大学制定の際、私学では旧制専門学校卒から新制大三回生に編入できましたが、国公立の大学では編入が認められず、国公立専門学校からの途中入学者もかなりありました。

最初にクラス会を開催したのは昭和四十七年一月です。

別に卒業二十周年を意識した訳ではありませんが、卒業以来交遊を続けていた地元在住の級友達の間で「二度クラス会を開催しよう」という話を持ち上がり、昭和二十五年旧制専門学校と二十七年大学の三部卒を併せて卒業以来満二十年振りに開催しました。

杉田嘉一郎先生のご出席も得て、十七名が集まり久々の再会を喜び合いましたが、残念ながら一回だけで中断しました。

当時、クラスの最も若手が四十余才、お互いに働き盛りで、クラス会の世話どころではなかったというところでしょ

クラス会便り

岸 要

昭和六十一年五月に、86立命デーが開催された際、「立命デーに参加してクラス会再開の相談をしよう」とクラスメートに呼びかけましたところ十一名が参加しました。参集者で相談した結果、同年十月、再開第一回のクラス会を都ホテルで開催しました。杉田嘉一郎、本島健次(故人)、両先生をお迎えて十六名が集まりました。

この時、クラスの最年少者も既に定年を視野に入れる年齢になっておりました。その後は二、三年毎に順調に回を重ねて、平成七年以降は毎年開催しています。

現在、最年少で六十八才、最高齢は約八十六才、若い頃には殆ど意識しなかった年齢の重みを否応なく自覚せられ、誰が言ってもなく、クラス会の頻度も上がってきたようです。

平成五年三月に開催したクラス会の席上、「クラス会便りなど情報誌を発行すれば皆の関心も高まり、参加者も増えると思う」との提案がありました。とりあえずその時のクラス会の状況報告を中心に、クラス会便り第一号を発行しました。その後、発行は不定時ですが年三回程程度、今年四月で第十五号になります。

内容は、全国校友大会、応化会通行事、クラス会報告、級友の消息、その他投稿ですが、級友の消息に最も関心が高いようです。

クラス会便りを送って一番喜ばれたのは、遠隔地に居住されている級友や病氣療養で外出不自由な級友達でした。関東在住の石橋義弘、鹿野敏夫、田

中茂勇氏等から懇切な声援のお便りを頂きました。西宮市にお住まいの筒井武雄氏はご高齢でクラス会に出席できないが、クラス会便りで級友の消息を知って懐かしいとお便りを頂きました。

堺市在住の福田泰治氏は肺臓癌手術後の闘病生活の中で、「クラス会のために私に協力できることはせてクラス会便りの投稿だけ、これを生かしていくに頑張ります」と、在学時代の思い出

の数々を投稿して頂いておりましたが、惜しくも昨年六月に死去されました。これら、クラス会に出席できない級友達の便りをクラス会便りに紹介し、また、次々と反響が広がり、音信の絶えていた級友達からも便りが寄せられるようになりました。

愛知県在住の香村浩氏は平成八年度クラス会に卒業以来始めて参加されるようになりました。

塩沢巨氏、廣崎巖氏、松本明光氏、等が平成九年度クラス会に初参加され、大いに賑わいました。

卒業以来四十数年を経て、我々のクラス会はずますます元気です。

おわりに、クラス会が元気に続けられるように、クラス会が最初のクラス会、立命デーまた再開第一回のクラス会、毎回世話役として呼びかけに協力して頂いた廣昭三氏や「クラス会便り」を発行せよ」と提案頂いた中森恒雄氏、また、クラス会開催の幹事役を輪番で快く引き受けて頂いている地元級友達の善意のお陰であることを申し添えます。

応用化学系 紹介

本年度着任されました応用化学系の新任教員をご紹介します。

生物工学科の北村清先生が3月に定年退職されましたので、後任として久保幹助教授が、沼津高等専門学校から移ってこられました。化学科では鈴木助手、吉助手の先生方が新たな戦力として加りました。

昇格人事に關しましては、里見潤先生、松岡政夫先生が教授に白石晴樹先生が助教授に昇任されました。



久保 幹

この度、御縁がございまして、1997年4月から生物工学科にお世話になることになりました。広々としたキャンパスでのびのびと研究・教育が出来ることをうれしく思っております。関西へは10年ぶりに帰って来たというところもあり、なつかしく感じしております。

研究は、主に微生物の工学的利用を目指した、「バイオマス資源の有効利用」と「炭化水素の生物分解による環境浄化」を主なテーマに掲げております。応用研究としては、生体産物を生物工学的に用いること及び、新たな付加価値を見出したことより、新たなプロセスの開発、また自然環境の浄化能力を解析し、工学的に利用した環境改善を目指しています。基礎研究としては、生物由来産物の機能解析と新たな微生物や酵素の創製を行っていきたく思っております。

今後、立命館大学発展のために、微力ではございますが、少しでもお役に立てればと考えております。同窓会の皆さまには、何かとお世話になることが多々あるかと思いますが、宜しくお願い申しあげます。

1983年広島大学工学部第3類卒業。1985年広島大学工学部研究科(工業化学専攻)博士課程前期修了。工学博士(大阪大学)。1985年1992年、東ソー(株)生物工学研究所副主任研究員。1992年1997年、国立沼津高等専門学校工学部助教(19941995)。米国イリノイ州立大学工学部在外研究員。1997年立命館大学理学部助教



古虹

私は中国の南京出身です。中国では浙江大学化学科を卒業後、江蘇省の化学研究所に配属され、6年余りにわたって化成品、医薬品、農業等の研究開発に従事しました。仕事中、常に自分の知識と力不足を感じていたので、8年前この日本に留学しました。物価の高い日本で勉強や生活の重圧に追われた留学は決して楽ではありませんでした。しかし、家族の励まし、日本の先生方、友人達の親切な指導や支援もあり、幾度の困難と挫折を乗り越えることができました。

大阪大学理学部の古い建物の中にある狭い研究室で五年間過ごした私がこのキャンパスに来た時の第一印象はとても新しく綺麗なキャンパスだということでした。

うことです。大阪大学では、光学活性ポリマーの溶液物性に関する研究を行いました。分子内及び分子間のキラルな相互作用により誘起された一次元協同現象(ヘリックス構造転移、誘起コレステリック液晶形成)について、実験と理論の両面からそのメカニズムを調べました。学生時代には先生の新しいideaに付いて行くのが精一杯でしたが、これからは自分の本当にやりたい事を考えようと思っています。でも、一番の夢はやはり、これまでの勉強・研究の成果を母国に持ち帰り、中国の高分子科学の発展に力を尽くす事です。どうぞ宜しくお願い申し上げます。

略歴
1984年7月 中国浙江大学化学科卒業。1984年8月 江蘇省揚州化学研究所研究員。1994年3月 大阪大学大学院理学部博士前期課程修了。1997年3月 同上博士後期課程修了。1997年4月 立命館大学理学部助教。



鈴木良尚

生活がすっかり気に入ってしまいました。温泉が余りないのがちょっと残念ですが、学生時代は、東北大学金属材料研究所というところで、タンパク質の結晶成長に及ぼす圧力効果という、およそ研究所の名前とは縁遠い研究をしていました。

私は、溶液中にランダムに分散している分子が、相転移して秩序正しい結晶になるという、その現象自身に非常に興味を持っており、結晶成長に関わらず、形態形成をとらぬ現象はひかれてしまいます。何を隠そう、私を結晶成長学に導いたのは、結晶表面の渦巻き模様や、樹枝状結晶の形態です。

ここ立命館大学では、その結晶を取り巻く溶液について、溶液化学という新しい武器を使って研究し、自らの研究の幅を広げていきたいと思っています。今後とも、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

略歴
1992年3月 東北大学理学部物理学第二学科卒業。1994年3月 同大学院理学部物理学専攻博士前期課程修了。1997年3月同博士後期課程修了。博士(理学)取得。1997年4月 立命館大学理学部勤務。
△専門▽結晶成長学
△趣味▽温泉めぐり、水泳、釣り

みちの杜の都仙台を離れ、初めての関西文化圏入りに多少の不安はありましたが、住んでみるとどうしてどうして、日本一の湖、琵琶湖のほとり

事務局だより

平成九年度の年会費の納入への協力をお願いいたします。

平成九年度年会費(平成十年三月三十一日迄)二千元を納入下さいませようお願い申し上げます。

過年度分の年会費の納入、未納入に關係なく、平成九年度分を納入下さい。年会費は、会運営の柱です。全会員の皆様が無難に納めて下さいますようお願いいたします。

申し上げます。

会員の皆様の会費納入状況を同封しています。平成九年度と共に、過年度分の納入につきまして、協力下さい。なお、平成七、八、九年度の完納者には、次回の名簿発行の際に無料配布の予定です。

送金には、同封の振替用紙をご利用下さい。なお、領収証は、郵便局の発行する受領証をもって代させていただきます。(注)平成九年度分は、平成九年度三月卒の一部の会員は、平成九年度分の会費を納入済です。)

★関東地区での科学技術懇話会・懇親会のお知らせ★

立命館大学応化会の本年度の事業として、関東地区で下記の要領の企画を行います。お誘い合わせの上、多数の皆様が参加されますようお願い致します。

当日は、田村会長はじめ、旧職員の鈴木、岩崎先生および現職員の谷口、松田先生が出席予定です。

1. 日時 平成9年11月28日(金) 午後6時～
2. 内容 第1部:「関東地区科学技術懇話会」…午後6時～
…話題提供…「エネルギー問題と核融合」
文部省 核融合研究所 教授
工学博士 本島 修氏
(旧職員の故本島健次先生のご長男)

第2部:「関東地区懇親会」…午後6時30分～
…近況報告、学内情勢など
…会費1万円(当日お支払下さい)

3. 場所 東京証券会館内7階「ホテルオーケラレストランニホンパン」
東京都中央区日本橋茅場町1-5-8 TEL.03-3667-4828
(出席の予約をして下さい。)
4. 連絡先 立命館大学理工学部応用化学系事務室内 応化会事務局
滋賀県草津市野路東1-1-1
TEL.0775-61-2658 FAX.0775-61-2659
E-mail:smv97009@bk.ritsumei.ac.jp

応化会役員名簿 (敬称略)

顧問 杉田嘉一郎 (旧教員) 鈴木啓三 (旧教員) 尾池耕三 (23年卒) 吉田 巖 (27年卒)

★年度幹事★

長 田村弘三郎 (31年卒)

副会長 谷口 吉弘 (40年卒)

常任幹事 岩橋 清 (23年卒) 岸野 光造 (25年卒) 岸 要 (25年卒) 香山 彰朗 (31年卒) 上原 正巳 (34年卒) 藤井 博 (38年卒) 北尾 舒彦 (39年卒) 東 正弘 (41年卒) 中村 尚武 (41年卒) 村上 俊男 (45年卒) 前川 昭 (52年卒) 廣瀬 和典 (60年卒) 目方 康人 (61年卒) 田口 肇 (62年卒)

△一部理科▽ 19年卒 奥(安井)悦 20年卒 林 幸男 22年卒 山本 徳治 25年卒 岸 要 26年卒 九鬼 敏隆

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

34年卒 上原 正巳 35年卒 寺井 良平 36年卒 山本 好春 37年卒 寺田 卓二 38年卒 藤井 博 39年卒 山本 修三 40年卒 堀田 晋司 41年卒 田田 健治 42年卒 加納 修 43年卒 岩崎 弘通 44年卒 富田 耕一 45年卒 磯島 文雄 46年卒 山上 満 47年卒 西山 彰朗 48年卒 岡本 朝朗 49年卒 平野 豊季 50年卒 花澤 明 51年卒 久保 豊夫 52年卒 佐々木 繁 53年卒 近藤 照雄 54年卒 大谷 芳亨 55年卒 北尾 修 56年卒 本田 嘉一 57年卒 東 正弘 58年卒 野田 博之 59年卒 藤原 長政 60年卒 岡村 昭信 61年卒 村上 俊男 62年卒 阿部 重典 63年卒 木村 賢久 64年卒 宮地 淳 65年卒 白石 晴樹 66年卒 小東 賢治 67年卒 深村 精治 68年卒 米村 秀一 69年卒 米澤 忠弘 70年卒 松本 浩一 71年卒 前川 昭 72年卒 河村 眞也 73年卒 村上 猛 74年卒 岡田 豊 75年卒 井口 晃 76年卒 木戸 隆宏 77年卒 河野 宏彰 78年卒 北河 英次 79年卒 野口 剛 80年卒 古川 博一 81年卒 奥村 秀三 82年卒 早川 聡 83年卒 菊池 英知 84年卒 田口 康人 85年卒 坂根 正恭 86年卒 矢野 博嗣 87年卒 大山 良隆 88年卒 奥野 茂樹 89年卒 小林 政則 90年卒 平木 利一 91年卒 柴田 典明 92年卒 山田 裕 93年卒 杉本 恭一 94年卒 畑屋 好文 95年卒 水野 勝重 96年卒 全 貴晴 97年卒 江盛 貴之 98年卒 高島 慎一 99年卒 山本 善史 (35年卒) 藤原 長政 (43年卒) 村上 俊男 (45年卒) 白石 晴樹 (47年卒) 小島 一男 (52年卒) 前川 昭 (52年卒) 田口 肇 (62年卒) 事務局長 加藤 稔 (院62年卒)

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

●応化会ニュース編集委員会

委員長 香山 彰朗 (31年卒) 委員 岩橋 清 (23年卒) 岸 要 (25年卒) 香山 彰朗 (31年卒) 上原 正巳 (34年卒) 藤井 博 (38年卒) 北尾 舒彦 (39年卒) 東 正弘 (41年卒) 中村 尚武 (41年卒) 村上 俊男 (45年卒) 前川 昭 (52年卒) 廣瀬 和典 (60年卒) 目方 康人 (61年卒) 田口 肇 (62年卒)

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治

△一部化学科▽ 27年卒 岸 要 28年卒 九鬼 敏隆 29年卒 八木 永治



編集後記

最近は大手日刊新聞に、母校立命館大学に関する記事や先生のコメントなどがしばしば掲載されるようになり、本学の知名度がますます上がってきたことを非常に嬉しく感じている同窓生の一人です。これも本学の先生を始め同窓生や大学側の積極的な活動によるものと思います。

当応化会もさらなる発展をはかるように努力する必要があります。そのために、巻頭の菊池正和先生の記事にあるごとく我々同窓生も活発な活動を展開していくことが、ひいては本学全体の発展につながることにすると確信します。

従来のニュースは学校側よりのワンウェイの情報に偏る傾向が強かったのではないのでしょうか。会員相互のコミュニケーションを活性化するため、まず「応化会ニュース」の紙面をおおいに活用していく編集方針に重点をおいていきたいと思っています。

しかしこれも編集子のみでは如何ともしがたく、皆様方のご協力なくしては達成困難であります。計画倒れにならないよう同窓生全員の「応化会ニュース」の意識を新たに、少しでも目的に近付けて行こうではありませんか。今回のニュースの内容は会員のご投稿が増え、従来に較べればちょっと

り計画に近付いたのでは？

(香山)

●事務局だより●

年会費等の納入についてお願い

一、平成九年度の年会費の納入への協力をお願い

平成九年度年会費（平成十年三月三十一日迄）二千円を納入下さいますようお願い申し上げます。年会費は、会運営の柱です。全会員の皆様が完納下さいますようお願い申し上げます。

なお、過年度分の会費納入、未納に関係なく、平成九年度分を納入下さいますようお願い申し上げます。

送金には、同封の振替用紙をご利用下さい。なお、領収証は、郵便局の発行する受領証をもって代えさせていただきます。（注：平成九年三月卒の一部の会員は、平成九年度分の会費を納入済です。）

二、寄付金募金についてお願い

会運営を円滑に行うために、運営資金の一部として、寄付金を募っております。寄付金は、一口二千円として何口でも承っております。ご送金の際は、会費納入振替用紙をご利用下さい。

本会の財政見通しは苦しい状態にありますので是非、皆様の積極的なご協力をお願い申し上げます。

三、会員名簿の配布について

次号（平成十年十一月発行予定、発行部数約七千部）の原稿を次の要領で募集しますので、ご協力をお願いします。

①一件 千～二千字程度

②「会員のページ」欄は、随想、提案のような内容、「トピックス」欄は、製品・技術紹介的な内容を求めます。

③募集〆切は、平成十年七月上旬

なお、事前に事務局にご連絡下さい。

四、事務局への連絡について

会員の住所変更、会費納入、寄付等についてのお問い合わせは、ハガキまたは電話でご連絡下さい。事務局の電話は、

（TEL 〇七七五-六一-二六五八（直））

（FAX 〇七七五-六一-二六五九）

平成 8 年 (1996 年) 度事業報告

I. 諸事業

- 1) 同窓会ニュースの発行 (第 5 回総会案内、年会費の請求等) 9 月 29 日
 2) 1996 年 3 月卒業生名簿作成 10 月 11 日
 3) 全会員への通信 (1 回目) 10 月 11 日
 (同窓会ニュース、第 12 回科学技術セミナーの案内、新卒者名簿、年会費の請求等)
 4) 在校生への通信 (同窓会ニュース他) 10 月 16 日
 5) 第 12 回科学技術セミナー 11 月 30 日

II. 諸会議

- 幹事会
 第 1 回 6 月 29 日
 第 2 回 11 月 30 日
 ○常任幹事会
 第 1 回 6 月 29 日
 ○同窓会ニュース編集委員会
 第 1 回 96 年 7 月 18 日
 第 2 回 97 年 2 月 25 日
 他に学内打ち合わせ 3 回
 ○セミナー等運営委員会
 第 1 回 96 年 8 月 24 日
 ○会長との事務打ち合わせ 数回

III. 在校生への援助活動

- 卒業・修了記念パーティ 97 年 3 月 21 日

平成 8 年 (1996 年) 度決算報告

一般事業会計

<収入の部>	予算額	執行額
繰越金	3,164,994-	3,164,994-
会費	4,000,000-	2,804,940-
寄付金	500,000-	256,500-
企業ガイド掲載料	0-	0-
雑収入	100,000-	803-
合計	7,764,994-	6,227,237-

<支出の部>

総会開催費		0-
セミナー等補助金	400,000-	291,235-
会議費	150,000-	134,973-
印刷費	1,000,000-	357,204-
企業ガイド作成費	0-	0-
郵送費	1,800,000-	644,619-
人件費	420,000-	339,500-
事務局費	40,000-	25,119-
雑費	100,000-	16,715-
拠出金	2,500,000-	2,500,000-
在学生の活動援助費	100,000-	76,950-
振込料金手数料	100,000-	49,910-
予備費	1,154,994-	0-
合計	7,764,994-	4,436,225-

次年度繰越金

1,791,012-

特別事業会計

<収入の部>	予算額	執行額
繰越金	653,314-	653,314-
拠出金	2,500,000-	2,500,000-
名簿売上 (一般)	250,000-	8,000-
名簿売上 (学生)	150,000-	44,000-
名簿荷造送料	50,000-	85,500-
名簿広告掲載料	0-	0-
雑収入	60,000-	9,602-
合計	3,663,314-	3,300,416-

<支出の部>

名簿出版費	0-	0-
名簿荷造送料	100,000-	36,640-
人件費	500,000-	225,000-
事務局費	50,000-	792-
予備費	3,013,314-	0-
合計	3,663,314-	262,432-

次年度繰越金

3,037,984-

平成 9 年 (1997 年) 度事業計画

I. 諸事業

- 1) 平成 9 年 3 月卒業生名簿作成 97 年 9 月下旬
 2) 同窓会ニュース (No.15) の発行 9 月下旬
 3) 全会員への通信 (1 回目) 10 月下旬
 (同窓会ニュース、第 13 回科学技術セミナーの案内、新卒者名簿、年会費の請求等)
 4) 在校生への通信 (1 回目) 10 月
 (同窓会ニュース、新卒者名簿等)
 5) 第 13 回科学技術セミナー (於: 東京) 11 月 28 日

II. 諸会議

- 1) 幹事会
 第 1 回 97 年 5 月 18 日
 第 2 回 10 月
 3) 常任幹事会
 第 1 回 96 年 5 月 18 日
 第 2 回 10 月
 4) 諸会議
 a) 同窓会ニュース編集委員会 必要に応じて年数回
 b) セミナー等運営委員会 必要に応じて年数回

III. 在校生 (卒研生・院生) への援助活動

- 1) 卒業・修了記念パーティ (300 人規模) 97 年 3 月

平成 9 年 (1997 年) 度予算

一般事業会計

<収入の部>	予算額
繰越金	1,791,012-
会費	3,000,000-
寄付金	500,000-
企業ガイド掲載料	0-
雑収入	10,000-
合計	5,301,012-

<支出の部>

総会開催費	0-
セミナー等補助金	500,000-
会議費	180,000-
印刷費	1,000,000-
企業ガイド作成費	0-
郵送費	1,800,000-
人件費	420,000-
事務局費	40,000-
雑費	100,000-
拠出金	0-
在学生の活動援助費	150,000-
振込料金手数料	100,000-
予備費	1,011,012-
合計	5,301,012-

特別事業会計

<収入の部>	予算額
繰越金	3,037,984-
拠出金	0-
名簿売上 (一般)	0-
名簿売上 (学生)	0-
名簿荷造送料	0-
名簿広告掲載料	0-
雑収入	60,000-
合計	3,097,984-

<支出の部>

名簿出版費	0-
名簿荷造送料	0-
人件費	500,000-
事務局費	50,000-
予備費	2,547,984-
合計	3,097,984-